中国におけるアーキビストの教育と養成

――ICA国際シンポジウムの報告を中心に――

安藤正人

一　シンポジウムの概要

国際文書館評議会（International Council on Archives, ICA）の専門職教育部会（Section of Archival Education, SAE）委員会が北京で開かれたのを機に、同部会と中国国家档案局との共催で、「アジア太平洋地域におけるアーキビストの教育と養成」をテーマとする国際シンポジウムが一九九一年九月九日から九月一四日の間、中国第一歴史档案館その他を会場として開催された。ICAは一九八八年以来、毎年連続してアーキビストの教育と養成に関する国際シンポジウムを開いているが、今回の北京シンポジウムはその番外編といったところである。(1)

参加者は日本からの二名（森安彦史料館教授および筆者）を含む一〇ヵ国約二〇〇人。大半は中国とヨーロッパのアーキビストで、アジア太平洋地域が主対象のシンポジウムであったにも関わらず、この地域からの参加者が極めて少なく、その意味ではやや寂しい感じであった。それでも、中国国家档案局の皆さんの献身的な運営と、中国全土から参加したアーキビストの方々の熱意に支えられ、シンポジウムそのものはきわめて活発かつ有意義であった。

全体シンポジウムの様子（第一歴史档案館）

中国人民大学档案学院での小シンポジウム参加者

シンポジウムの日程は、九月九日と一〇日に北京の中国第一歴史档案館で全体シンポジウムが行われたあと、一一日から一三日まで、北京、瀋陽、南京の三都市で、それぞれ周辺地域からの参加者を得て小シンポジウムが開催された。外国からの参加者は三つのグループに分かれて、この三都市での小シンポジウムに出席した。筆者は森氏とともに北京グループに加わった。

中国第一歴史档案館での全体シンポジウムでは、インド、インドネシア、フィリピン、日本の各国と太平洋地域、およびICAから報告があり（代理報告およびペーパー参加を含む）、そのあと質疑が行われた。

また筆者が参加した北京グループの小シンポジウムは中国人民大学档案学院を会場として開催された。この小シンポジウムへの中国側の参加者は人民大学档案学院の教官を中心に二〇人ほど。ここではまず中国側が主報告を行い、次いで筆者を含む外国人参加者がそれぞれ自国のアーキビスト養成事情について説明したあと、討論に移った。少人数ゆえ、議論は真剣な中にも和気あいあいのうちに進められた。档案学院の若手女性講師に実に議論熱心な方が一人おり、外国人参加者に対してなかなか上手な英語で質問を浴びせては、しつこく食い下がり、最後には副院長先生にたしなめられていた。このあたり、予想していたよりもはるかに自由かつ主体的に意見を言い合う雰囲気があり、印象に残ったことのひとつであった。

以下、本稿ではシンポジウムで行われた諸報告のうち、中国の報告に絞って概要を紹介したい。ただ必ずしも報告そのままではなく、報告後に行われた質疑や、いくつかの文献から得た情報も加えながら私なりにまとめ直したものなので、その旨あらかじめお断りしておく。(2)

二　中国人民大学档案学院におけるアーキビストの教育と養成

1　歴史

中国人民大学档案学院は、中国でもっとも古い、かつ最大のアーキビスト教育養成機関である。その歴史は、中華人民共和国成立後間もない一九五二年、中国共産党と政府が档案の保存強化政策を打ち出したことによって、中国人民大学の中に档案専修班が設けられたことに遡る。[3] これは在職者を対象とした一年間のコースであったが、翌一九五三年に档案専修科と改称して二年間のコースになった。一九五五年、この課程を基礎に四年制の歴史档案系（学科）が設立された。一九八五年にはさらに昇格して档案学院となった。以来、同学院は国家教育委員会により、档案学の全国的教育研究センターおよび各大学の档案学教師の訓練センターとして位置づけられている。なお、創立以来一九九一年までの三九年間で卒業生は約四、〇〇〇人にのぼり、その多くは全国の档案館などでアーキビストとして[4]档案事業に携わっている。

2　課程

档案学院には次の四つの課程があり、現在五〇〇人程の学生が在籍している。

(1)研究生［大学院］

一九七九年に初めて正規の研究生［大学院生］を受け入れ、一九八四年に国務院から档案学専業硕士［修士］の学位号授与権を認められた。修業年限は三年。档案学、中国政治制度史などの研究専攻がある。入学者は档案学院の本

科卒業生が大半だが、現場から入ってくる人や、歴史、語学、図書館学、化学、物理などの分野から入ってくる人も少数いる。卒業生はさまざまな研究機関や大学に就職している。

(2)本科［学部］

档案学院の中心となる課程で修業年限は四年。中等学校卒業者（日本の高卒にあたる）が入学する。専攻課程は档案学、科技（科学技術）档案管理学、档案保護技術学の三つ。ほかに情報管理者を養成する特別コースがある（シンポジウム報告では以上のような説明であったが、後掲注（2）の3の資料によれば他に歴史档案専攻課程がある）。

档案学専攻は一般のアーキビスト養成を目的とし、科技档案管理学専攻は工業、農業、自然科学研究、気象、天文、環境保護、医学など、科学技術分野のアーキビスト養成を目的としている。档案保護技術学専攻は、いわゆる保存管理者（プリザベーション・アドミニストレイター）や保存修復技術者（コンサベーター）の養成課程と見てよかろう。

(3)専科［在職者教育］

二年間の在職者対象専門課程だが、一部中等学校新卒者も受け入れている。档案学、科学技術档案管理、档案保護技術、人事档案管理、記録復元技術、文件管理などの専攻コースがある。

(4)通信教育

档案学院と中国人民大学函授学院［通信教育部］が共同で運営している課程で、主として現職のアーキビストを対象に、档案学と科学技術档案管理の二コースを設けている。

以上の四課程のほか、档案学院教官や内外の現職アーキビストのための高等研修コースを随時設けている。

3　スタッフ

档案学院には現在七九人の教職員がいる。内訳は教授七人、助教授二三人、講師三〇人、助手一五人、事務官四人である。「档案管理学教研室」「科技档案管理学教研室」「政治制度史と専業史教研室（档案史教研室）」「档案文献編纂学教研室」「档案保護技術学教研室」の五つの教育研究室を中心に（後掲注（2）の1の資料によれば、ほかに「档案と文件管理教研室」がある）、三つの科学教室、档案調査室、レファレンス室、コンピュータ室、事務室、編纂室などに分かれて所属している。

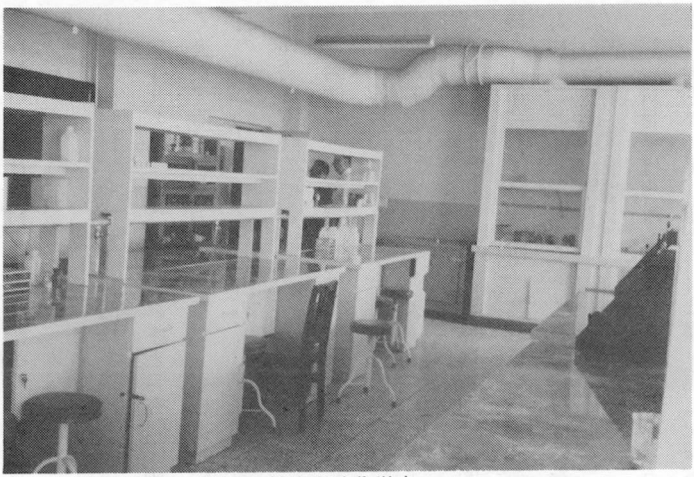
教官は概して若く、档案学のほか、歴史学、文学、情報学、図書館学、管理科学、コンピュータ科学、建築学、電子工学、技術工学、物理学、生物学、化学などの専門家を揃えている。彼らのほとんどは档案館に関する実務経験を持っている。また非常勤講師として現職アーキビストを招聘することもある。

4　設　備

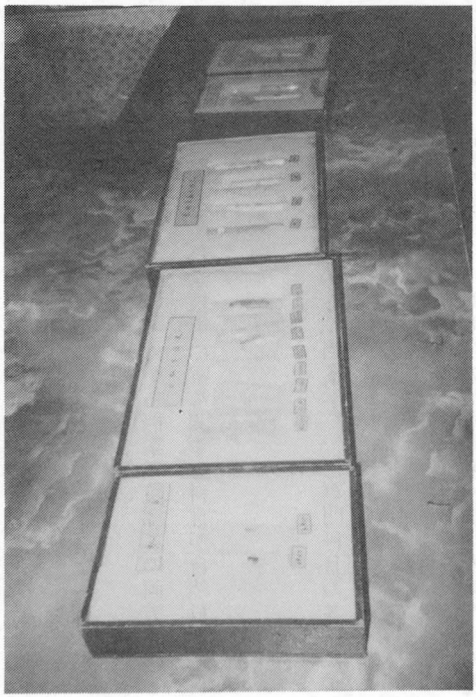
档案学院には一万冊以上の図書と数千点の参考資料や卒業論文を備えた参考図書室がある。またコンピューターセンターや、保存科学や修復技術を学ぶための化学室、生物劣化室、修復技術室などの科学教室がある（写真参照）。

5　カリキュラム

档案学院で受講できる科目は全部で約二〇〇科目に及ぶ。その特徴として、シンポジウム報告では、(1)基礎教育科目の充実、(2)人文社会科学系科目と自然科学系科目の組合せ、(3)理論と実践の結合、(4)隣接関連科目の重視、(5)総合科目の設置、の五点があげられた。



档案学院化学室



生物劣化室の害虫標本

(1)基礎教育科目の充実

自然科学、社会科学、人文科学の基礎科目で、大半は必修科目である。日本の大学の一般教育科目にあたるものと思われる。

(2)人文社会科学系科目と自然科学系科目の組合せ

アーキビストは人文社会科学と自然科学両方の知識と技能を必要とする。その考えから档案学院はこの両方を等しく充実することに力を入れており、档案学院の全専門科目の中でいうと、科学技術档案に関する科目が自然科学系科目の約二〇パーセントを占めている（やや意味が通じないが報告原文のママ）。

(3)理論と実践の結合

理論学習と実務習得はアーキビスト養成において共に軽視できないものである。档案学院では専門科目の各々について、約六〇パーセントを理論、約四〇パーセントを実務にあてるよう配慮している。

(4)隣接関連科目の重視

中国では近代科学技術の発展によって、図書館学、情報学、記録管理学、管理科学などの隣接分野と档案学との懸隔が次第に狭まっており、実務的には情報管理という形で統合されつつある。したがって、これらの関連科目を取り入れることは、学生にとって単に隣接分野を知るというだけでなく、実務上も必要である。

(5)総合科目の設置

総合科目とは専攻を越えた共通科目を言うらしい。現在このカテゴリーに入る科目は各専門分野の五パーセント未満に過ぎないが、総合科目は繰り返しを減らし時間の節約と教育の質の向上に資するのみならず、学生の創造性と問題解決能力の開発に役立つので、学院としては拡充を検討中である。具体的な内容がややわからないが、報告後の質

第1表　中国人民大学档案学院専門課程科目一覧

担当室名 科　目　名	履修時間	档案学専攻課程	科技档案管理専攻課程	档案保護技術専攻課程	歴史档案専攻課程
档案史教研室					
中国档案史	54	◎必修			
世界档案史	54	◎必修			
档案管理学教研室					
档案学概論	.36	◎必修			
档案管理学	180	◎必修			
芸術档案管理	36	○選択			
音像档案管理	36	○選択			
科技档案管理学教研室					
科技档案管理学	108	◎必修			
科技文件材料学	72	○選択	◎必修		
機械設計基礎	72		◎必修		
機器製造工程学	72		◎必修		
機械製図	72		◎必修		
科技档案編研学	36		◎必修		
経営档案管理	36		◎必修		
档案管理とコンピュータ	72	◎必修			
電子学原理	72		◎必修		
技術経済法概論	36		○選択		
標準化概論	36		○選択		
档案保護技術学教研室					
档案保護技術学	80	◎必修			
档案保護環境と技術	126			◎必修	
普通物理	216			◎必修	
普通化学	72	○選択			
分析化学	108			◎必修	
有機化学	108			◎必修	
無機化学	90			◎必修	
档案有害生物防治	108			◎必修	
档案修復技術	108			◎必修	
静電複写技術	36			◎必修	
マイクロ撮影複製技術	144			◎必修	
档案文献編纂学教研室					
档案文献編纂学	90				◎必修
中国地方史編纂学	36				○選択

（注）一部、原資料の記述の誤りではないかと思われる箇所もあるが、元のままとした。

第2表　中国人民大学档案学院編『档案専業主要専業課程教学大綱』目次

1．档案学概論教学大綱

第一編　档　案
　第1章　档案の起源と沿革
　第2章　档案の定義と属性
　第3章　档案の価値と作用
　第4章　国家档案全宗

第二編　档案工作
　第5章　档案工作系統の内部構成と外部環境
　第6章　档案工作の矛盾、規律、性質と原則
　第7章　档案工作の現代化

第三編　档案事業
　第8章　国家档案事業管理
　第9章　档案室と档案館
　第10章　档案専門教育

第四編　档案学
　第11章　档案学及びその科学体系
　第12章　欧米档案学の発生と発展
　第13章　中国档案学の発生、発展及びその趨勢

2．文書学教学大綱

　第1章　文件［文書］の特徴と機能
　第2章　公務文件の種類
　第3章　通用公文の書式と稿本
　第4章　通用公文の撰写要則と方法
　第5章　通用公文処理
　第6章　公文立巻の原則と方法
　第7章　案巻の系統化整理と編目
　第8章　文件工作の組織と制御

3．档案管理学教学大綱

　第1章　档案の収集
　第2章　档案の整理
　第3章　档案価値の鑑定
　第4章　档案の統計
　第5章　档案検索手段と検索体系
　第6章　档案著録
　第7章　档案索引
　第8章　档案分類表と档案主題詞表
　第9章　档案目録と指南
　第10章　档案の提供利用
　第11章　档案の編研

4．科技档案管理学教学大綱

第一編　科技档案と科技档案工作概述

第１章　科技档案概念
第２章　科技档案の種類と内容構成
第３章　科技档案の機能
第４章　科技档案工作概述

第二編　科技文件材料工作に対する档案部門の監督指導
第５章　科技文件材料及びその管理工作
第６章　科技文件材料の形成蓄積工作の監督指導
第７章　科技文件材料の整理工作の協助指導
第８章　科技文件材料帰档の協助指導

第三編　科技档案管理
第９章　科技档案収集工作
第10章　科技档案整理工作
第11章　科技档案鑑定工作
第12章　科技档案保管、統計工作

第四編　科技档案資源の開発利用
第13章　科技档案資源の開発利用及びその条件
第14章　科技档案の検索
第15章　科技档案の編研
第16章　科技档案提供服務

第五編　科技档案の現代化管理
第17章　科技档案の計算機管理システムの研制
第18章　科技档案の計算機検索の原理
第19章　科技档案の縮微［マイクロ写真］と複製技術
第20章　計算機ネットワーク技術及びその応用

第六編　我国の科技档案事業
第21章　科技档案事業の建設と発展
第22章　科技档案事業の組織建設
第23章　科技档案事業管理

第七編　科技資料工作
第24章　科技資料
第25章　科技資料管理

５．中国政治制度史教学大綱

第一編　古代中国政治制度
第１章　先秦政治制度
第２章　秦漢魏晋南北朝の政治制度
第３章　隋唐五代宋の政治制度
第４章　夏遼金元の政治制度
第５章　明清の政治制度

第二編　中華民国政治制度
第６章　辛亥革命と南京臨時政府
第７章　北洋軍閥統治下の北京政府
第８章　北洋政府の地方制度
第９章　中国国民党統治時期の中央政制
第10章　中国国民党統治時期の地方制度

第三編　人民民主制度
第11章　土地革命時期の工農民主政権
第12章　抗日戦争時期の抗日民主政権
第13章　解放戦争時期の人民民主政権
第14章　中華人民共和国政治制度

6．档案文献編纂学教学大綱

第1章　档案文献編纂学史略
第2章　档案文献編纂工作概述
第3章　編纂題目の選定
第4章　档案文献の調査
第5章　档案文献の選定
第6章　档案文献の校訂
第7章　档案文献の転録加工
第8章　档案文献の点校加工
第9章　档案文献の標題
第10章　档案文献の編成
第11章　評述性材料（注釈、按語、序言）の編制
第12章　査考性材料（年表、挿図、備考、編輯説明）の編制
第13章　検索性材料（目録、索引）の編制
第14章　档案文献の出版

7．档案保護技術学教学大綱

第1章　档案用紙材料の耐久性
第2章　档案筆記材料の耐久性
第3章　音声映像档案の作成材料の耐久性
第4章　档案収蔵庫の温湿度の制御と調節
第5章　光の档案に対する危害及びその防治
第6章　空気汚染の档案に対する危害及びその防治
第7章　档案に損害を与える微生物及びその防治
第8章　档案の害虫及びその防治
第9章　档案収蔵庫中の噛歯動物及びその防治
第10章　档案収蔵庫の建築と設備
第11章　档案修復技術

8．社会科学情報工作概論教学大綱

第1章　科学発展と情報保障
第2章　情報と社会科学情報
第3章　情報交流
第4章　社会科学情報工作概述
第5章　社科文献情報源
第6章　需要者及び情報需求研究
第7章　情報工作現代化
第8章　我国社科情報事業の組織管理研究

9．マイクロ撮影複製技術教学大綱

第1章　概論
第2章　マイクロ写真の形式

第3章　マイクロ写真撮影設備
第4章　マイクロフィルム
第5章　銀塩マイクロフィルムの現像
第6章　原本の撮影
第7章　マイクロ写真の複写と復元
第8章　マイクロ写真の質量検査
第9章　マイクロ写真の検索
第10章　マイクロ写真の保存と管理
第11章　マイクロ写真の法律地位
第12章　新技術の応用

10. 中国档案事業史教学大綱

第1章　档案の発生と商周時期の档案工作
第2章　春秋戦国、秦、漢、魏晋南北朝時期の档案工作
第3章　隋唐、宋、遼金元時期の档案工作
第4章　明、清時期の档案工作
第5章　阿片戦争後清朝の档案工作
第6章　太平天国の档案工作
第7章　辛亥革命時期の档案工作
第8章　北洋政府統治時期の档案工作
第9章　国民党政府統治時期の档案工作
第10章　中国共産党建党初期と革命根拠地の档案工作
第11章　建国後社会主義改造時期の档案工作
第12章　社会主義全面開始時期の档案工作

11. 外国档案事業史教学大綱

第一編　古代時期の档案工作
第1章　古代東方奴隷制国家の档案と档案工作
第2章　古代ギリシャの档案と档案工作
第3章　古代ローマの档案と档案工作
第4章　封建社会初期の档案工作（5~11世紀）
第5章　封建社会中期の档案工作（11~15世紀）
第6章　封建社会末期の档案工作（15~18世紀中期）

第二編　近代時期の档案工作（1789~1917年）
第7章　近代時期の档案工作改革
第8章　近代時期档案学理論の形成と発展
第9章　近代時期の档案教育
第10章　近代時期の経済档案館

第三編　現代時期の档案工作
第11章　十月革命後ソビエトロシアの档案工作改革
第12章　ソ連の档案事業建設
第13章　欧州資本主義国家の档案工作
第14章　東欧社会主義国家の档案工作
第15章　北米各国の档案工作
第16章　大洋州各国の档案工作
第17章　アジア、アフリカ、ラテンアメリカ各国の档案工作
第18章　国際档案組織及びその活動

疑では、検索論や情報論がそれにあたるという答えであった。

では具体的なカリキュラム内容はどうなっているか。基礎科目や隣接関連科目についてはわからないが、档案関係の専門科目については二つの資料がある。

第1表は、注（2）の3にあげた専門課程科目一覧をまとめたものである。縦軸には、五つの研究室がそれぞれ担当する科目を並べ、横軸には各科目の総授業時間、および専攻課程ごとの必修・選択の別を掲げた。

第2表は、注（2）の1にあげた档案学院の編集になる『档案専業主要専業課程教学大綱』の目次である。説明によれば、この本は中国人民大学档案学院自身の最新の教育指導要領として作成されたものであると同時に、他の大学等高等教育機関における档案学教育の参考にしてもらうことをもねらいとしている。中身を見ると、「档案学概論」以下一一の大分野に分けられ、各分野の学習内容が体系的かつ詳細に述べられている。国際的にみても、アーキビストの教育指導要領として、ひとつのモデルを提供するものと言えるだろう。

6　教材

一九五二年に档案専修班が創立された時は、ソ連の教科書を使用していた。その後、研究を進め、一九五四年に档案史教研室の編集で『中国档案史教学大綱』を出版。歴史档案系成立後、『档案工作の理論と実践』『文書処理学』『中国国家機関史』『中国档案史』『文件材料保護技術学』『档案文件公布学』などの教科書を相次いで編集・出版した。また一九五〇年代末には『文書学』『技術档案管理学』などの新教材を、一九六二年には、中国人民大学出版社から『档案管理学』と『档案保護技術学』を出版している。

その後も、中国では中国人民大学档案学院の教官はもとより、多くのアーキビストが档案関係の研究書や教科書を

たくさん出版しており、教材の量はかなり豊富であるように思われた（それでも中国の人たちは足りない足りないと言うが）。

7　教育方法と試験

教育方法としては、講義、実習、討論、読書レポート、小論文、業務分析、実演見学、フィルム・ビデオ見学、機関訪問、社会調査、シュミレーション、実験、業務実習など、多彩な方法がとられている。特に機関訪問、社会調査、実験、業務実習には力が入れられている。実験がある専門科目は二〇以上に及ぶ。地方の档案館などの協力で行なう現場実習は、学部課程の学生に対して四年間の内に二ヵ月ずつ二回、計四ヵ月が義務づけられている。

学生の学業成績は、一学期に二回実施される試験（年二学期制なので一年に計四回）と実習や討論を通じて評価される。評価の比率は、試験が六〇～七〇パーセント、実習や討論が三〇～四〇パーセントである。実習の成績評価は、档案館で実地に指導した現場のアーキビストが行なう。

8　研究活動

档案学院の教官は極めて活発な研究活動を行なっている。一九八六年から一九九〇年までのわずか五年間に出版した教科書、論文集、翻訳書は六九冊、雑誌に掲載した論文や翻訳論文は四〇〇本にのぼり、多数が各種の賞を獲得している。国家教育委員会が出している档案学関係の教科書も、大半は中国人民大学档案学院の教官の編集によるものである。また档案学院独自の学術雑誌として、『档案学通訊』を二ヵ月に一回発行している。発行部数は四万部である。

档案学院は中国国内および海外の高等教育研究機関と盛んな研究交流を行なっており、シンポジウムの開催、教官

の海外派遣、外国人専門家の招聘などに熱心である。また教官はそれぞれ中国档案学会の会員として主導的な役割を演じており、全国記録標準委員会、マイクロフィルム標準委員会、中国文化保護委員会などの全国委員会の委員としても活躍している。

三　その他の学校におけるアーキビストの教育と養成

1　他大学における档案教育

中国人民大学以外の大学におけるアーキビスト養成の現状をみると、一九七九年以降一九八五年までに二八の大学・高等専門学院が档案学の学科あるいは専門課程を設けている（第3表参照）。このあと、一九八五年八月に国家教育委員会と国家档案局が「档案学教育の強化と改革に関する意見書」を発表したことにより、档案学に関する課程を持つ大学・高等専門学院の数は、翌一九八六年末までに一挙に四七校に増加、学生総数は三四、〇〇〇人（うち在職者三一、〇〇〇人）に達したということである。

また大学院課程も新たに四川大学档案系と杭州大学歴史系に設けられた。

2　中等学校における档案教育

中国では一九八〇年から、中等学校（ほぼ日本の中学と高校を合わせたものにあたる）にも档案学に関するコースを置くようになっている。最初にできたのが上海市虹口中学の文書中専班（四年制）。その後、北京、天津、杭州、青島など多くの普通中学、職業中学に档案班あるいは秘書班が設置された。一九八五年の統計でみると（第4表）、その数は

第3表　中国の大学におけるアーキビスト養成課程（1985年現在）

学校名称	養成課程設置名称	課程種類	設置年	場所
中国人民大学	档案学院	研究生、本科、大専	1952	北京
北京聯合大学	文法学院档案系	本科	1979	北京
鄭州航空工業管理学院	科技管理系科技档案専業	本科、大専	1979	鄭州
金陵職業大学	档案専業	大専	1980	南京
南開大学分校	档案系	本科	1981	天津
内蒙古大学	歴史系档案専業	幹部専修科	1981	呼和浩特
遼寧大学	歴史系档案専業	本科、幹部専修科	1981	沈陽
上海大学	文学院档案系	本科、幹部専修科	1981	上海
四川大学	档案系	本科、幹部専修科	1981	成都
杭州大学	歴史系档案専業	本科、大専、幹部専修科	1982	杭州
河北大学	歴史系档案専業	本科、幹部専修科	1983	保定
蘇州大学	歴史系档案専業	本科	1983	蘇州
安徽大学	歴史系档案専業	本科、大専、幹部専修科	1983	合肥
山東大学	歴史系档案専業	大専、業大	1983	済南
江漢大学	秘書系档案専業	大専、幹部専修科	1983	武漢
湘潭大学	歴史系档案専業	大専、幹部専修科	1983	湘潭
貴州人民大学	秘書档案班	大専	1983	貴陽
黒龍江大学	歴史系档案専業	本科、幹部専修班	1984	哈爾濱
武漢大学	図書情報学院档案専業	本科	1984	武漢
雲南大学	歴史系档案専業	本科、幹部専修科	1984	昆明
貴陽市金筑大学	文法系文書档案専業	大専	1984	貴陽
西蔵民族学院	档案幹部専修科	大専	1984	咸陽
金城聯合大学	文書档案班	大専	1984	蘭州
西北師範学院	歴史系档案専業	幹部専修科	1984	蘭州
上海機械専科学校	管理工程系科技档案専業	幹部専修科	1984	上海
吉林大学	歴史系档案専業	本科、業大	1985	長春
江西大学	歴史系档案専業	大専、幹部専修科	1985	南昌
広州大学	中文系档案専修班	大専	1985	広州
西北大学	歴史系档案専業	本科	1985	西安

（出典）《当代中国》編輯部編『当代中国的档案事業』（中国社会科学出版社、1988年），p. 336.

四〇ほどである。現在では、四川省档案学校、吉林省文件档案職業学校、北京文件档案職業学校、湖南省図書情報档案学校[5]のように、档案教育を専門にした中等学校もいくつか生まれている。

これらの中等学校の档案学課程の目的は、全国のさまざまな档案機関に档案学に関する知識を持った中級レベルのスタッフを供給することにある。

四　在職者教育

1　アーキビストの種類と在職者教育の役割分担

中国のアーキビストはほぼ三つのカテゴリーに分けられる。(1)国、省、市、県など各レベル行政体の档案局および総合档案館に属するアーキビスト、(2)党、政治組織、軍など、大規模な組織の部門档案館に属するアーキビスト、そして(3)企業の档案部門に所属するアーキビストである。

その人数は総計百万人を越えるといわれるが、さまざまな歴史的事情により、知識・教育レベルは概して低く、一九九〇年の推計によれば、大卒は全体の一五パーセント、また档案学専門教育を受けた者は、わずか四パーセントにとどまっている。さらに都合の悪いことには、末端レベルのアーキビストは頻繁に入れ替わっており（毎年約三分の一が他の部署に異動するといわれる）、档案管理技術の高度化や専門化についていけない状況が生まれ

第4表　中国の中等学校における档案教育（1985年現在）

地区	北京	天津	河北	山西	吉林	上海	江蘇	浙江	安徽	山東	河南	湖北	湖南	四川	貴州	陝西	甘粛
档案専業課程を設置している中等学校数	7	3	3	1	1	2	2	6	2	2	1	1	1	5	1	1	1

（出典）第3表に同じ，p.337.

ている。在職者教育が極めて重要な位置を占めるゆえんである。

在職者教育の責任は、国家档案局、地方档案局、中央省庁档案部門が負っている。

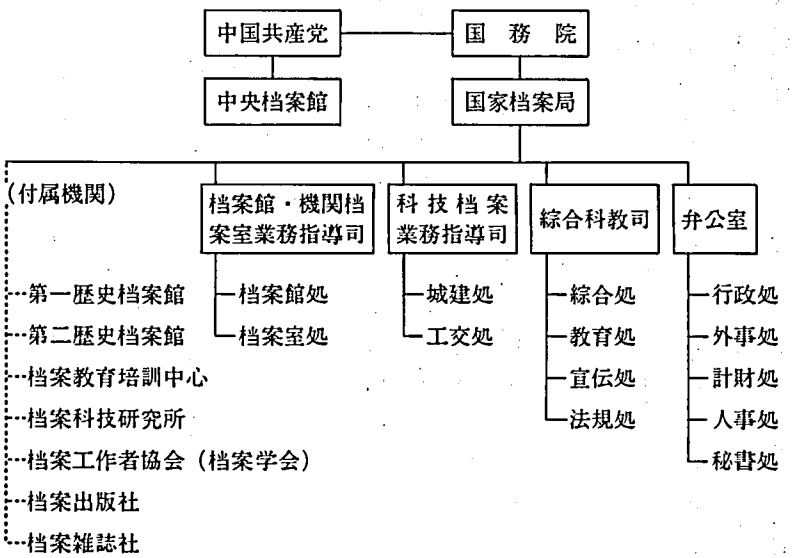
(1)国家档案局

国家档案局は、国内のあらゆる種類、あらゆるレベルの档案館や档案室を指導・監督する立場にある国務院直属の中央機関で、全国のアーキビスト教育について統括責任を負う一方、自身でも中央・地方レベルのアーキビストに対して在職者研修を実施している。そのため国家档案局には、教育処という部署と、档案教育培訓中心［档案教育研修センター］という在職者研修機関が設けられている（図参照）。

(2)地方档案局

省、自治区、市、県などには、それぞれの档案行政を管轄する档案局があり、档案館の運営とアーキビスト教育について責任を負っている。現在一二の省と市が、在職アーキビストの教育施設を設置している。

中国国家档案局の組織図



(3)国の中央省庁档案部門

国の中央省庁の档案部門は、各省庁内におけるアーキビストの在職者教育に責任を負っている。

2　在職者教育の種類

中国におけるアーキビストの在職者教育は、資格の取得に結びつく長期のものと、そうでない短期の研修との二つに分かれる。以下のうち(1)～(3)は前者のタイプに属し、(4)と(5)は後者のタイプである。

(1)大学専科［特別高等コース］

大学学部レベルの専門教育を提供することを目的としたもので、档案学課程を持つおよそ二二の大学に開設されている。第3表に見える「大専（大学専科）」「幹部専修科」がこれにあたると思われる。受講資格は、中等学校卒業［高卒］以上の学歴と五年以上の経験を有する四〇歳以下の現職アーキビスト。期間は二年間である。主な履修科目としては、政治経済学、哲学、中国古代史、中国近代史、古代漢語、現代中国語、論理学、基礎档案学、古文書学、文件管理、档案管理学、科学技術档案管理学、档案編纂学、档案保護技術学、中国档案史、外国档案史、コンピュータ応用、などがある。一九九〇年末までの修了者総数は約四、五〇〇人である。

(2)業余教育［成人教育］

中国語で業余教育［職務時間外教育］と呼ぶ、いわゆる成人教育は、中国の教育システムの中で重要な部分を占めており、あらゆる分野で発達している。アーキビストの世界においても、成人大学、夜間大学、放送大学、通信教育、検定試験などの形で、在職者にさまざまな業余教育の機会が提供されている。特に発展がめざましいのは、一九八〇年以降のことのようである。カリキュラムは大学専科に準じ、履修期間はほぼ三年である。アーキビストの業余教育

は形式が多様で管理が分散しがちなので、レベルを保証するために、国により一定の基準が設けられている。

(a)業余大学［成人大学］、夜大学［夜間大学］などの成人教育機関による档案教育は、一九五八年以来一一機関で行なわれており、一九九〇年までの修了者の数は五、〇〇〇人を越えている。タイプとしては、次の三つがある。①档案部門の委託によるコース（例・陝西省档案局の委託による陝西師範大学夜大学档案専業班）、②档案部門との連合によるコース（例・浙江省档案局と杭州大学歴史系との連合による档案幹部新修［研修］班）、③業余学校独自のコースで档案部門が協力するもの（例・北京市および同市宣武区の档案部門が協力する北京市宣武区紅旗業余大学の档案専業）。

(b)放送大学の档案専門コースは、一九八五年に中央広播電視大学［放送テレビ大学］と国家档案局との協同で開設された。同時に、二八の省と自治区、市の放送大学でも同様のコースが開始された。期間は三年間（フルタイムで受講すれば二年間も可）で、ラジオとテレビを利用して勉強する。スクーリング受講者は総計三万人以上にのぼり、一九九〇年末までのコース修了者は約二万人である。

(c)通信教育の档案専門コースは、一九八二年に中国人民大学函授学院［通信教育部］に開設され、ついで各地にその地域支部が開設された。地域支部は省、市、自治区、直轄市の档案局の協力のもとに運営されている。三年間の中等学校卒業レベルコースと、五年間の大学コースがある。一九八八年までの履修者は一、〇〇〇人以上である。アーキビストの通信教育課程は、ほかに黒龍江大学、郟州大学、江西大学にも設けられている。

(d)検定試験は独学で档案学を学んだ者が資格を取れるようにするためのもので、一九八三年以来、[6]北京、江西省その他いくつかの省の高等教育自学考試委員会が档案専門コースを設け試験を実施している。受験者は六、〇〇〇人以上である。北京の場合、試験科目数は哲学、政治経済学、科学社会主義、外語、档案管理学、科技档案管理学など全部で一八科目で、年に二回、一回二科目ずつ受験できる。したがって全科目合格するには四年から六年かかる。一〇

科目合格すると中等学校卒業レベルの資格が与えられ、一八科目全科目に合格すると大学専科卒業資格が与えられる。

(3)専門職認定教育

これは技術系アーキビストおよび管理職アーキビストのために一九八八年に開設されたコースである。受講資格は、中等学校卒業以上の学歴と五年以上の技術職または管理職経験を持つ三五歳以上の者となっている。一九八八年以来これまでに、国および省の档案局の委託・協力のもとで三〇大学がこのコースを設けており、既に八、〇〇〇人以上のアーキビストが履修して専門職の資格認定を受けている。履修科目は政治経済学、哲学、古代漢語、古文書学、文件管理、档案管理学、科学技術档案管理学、档案編纂学、档案保護技術学、外国档案史、コンピュータ応用など、八ないし一〇科目。履修期間は一年間のフルタイム・コースから二年間のパートタイム・コースまでいろいろある。

(4)短期研修

短期研修はアーキビスト在職者教育の最も基本的な手段として、各レベルで行なわれている。一九八三年、国家档案局は規則を設け、短期研修には古文書学および文件管理学、档案管理学、科学技術档案管理学、档案保護技術学、档案編纂学の五科目を含むべきことと、体系的な専門教育を受けていないアーキビストは、必ずこの五科目の短期研修を受けるべきことを定めた。

短期研修の期間と形態はさまざまで、たとえば省の档案局や中央省庁の档案部門はふつう三ヵ月以上の全日制の短期研修を実施しているのに対し、市の档案局が行なう短期研修は一ヵ月から二ヵ月の全日制あるいは半・全日制である。実施方法は、機関内でやる場合と大学に委託する場合とがある。また大規模ないし中規模の市では、六ヶ月間の定時制の短期研修を実施しているところもある。

以上のような体系的な研修課程のほかに、市以上の档案局では科学技術の発達などにともなう档案館実務の拡充・

発展に対応するため、さまざまな臨時研修会を開催している。最近のテーマをあげると、会計档案論、法律档案論、档案記述法、マイクロフィルム技術、事業経営の近代化などがある。このタイプの研修は期間もかなり短いものである。

討論会やシンポジウムもしばしば開かれている。たとえば一九八八年には、安徽省档案学会主催による档案法の施行に関するセミナーが開催された。一九八九年には、山東省档案局が档案館館長のための討論会を開催した。また一九八六年以来、国家档案局と国家教育委員会は、共催で档案学に関する夏期講座を開いている。これらのセミナーや討論会は、主として档案事業や档案学がいま直面している理論上、実務上の課題を議論するためのもので、アーキビストの専門知識と档案学の学術交流の進展にたいへん役だっている。

(5)ポスト・トレーニング［職種別研修］(7)

各実務者の現場のポストの要請に応じて、政治学理論、職業倫理、科学文化知識、その他の専門知識および技能の研修を行うものである。一九八八年に山西省档案局が初めて市および県の档案館長を対象にしたコースを設置し、その後、一九九〇年一〇月に国家档案局がアーキビストの職種別研修の発展についての提言なるものを出し、計画的かつ体系的なトレーニングを行うよう求めた。現在、数省の档案局が既に職種別研修を実施しており、他の省は検討中である。

五　在職者教育の成果

以上述べてきたような、さまざまな在職者教育がどのくらい普及しているかを統計的にみてみよう。

第5表は一九九〇年現在の統計である。まず、中央・地方のいわゆる档案局と総合档案館、および中央政府・省政府各省庁の档案部門と大規模企業の档案部門に働くアーキビストの数は、合計八一、一三六人（これには中小組織の档案室などに勤めるアーキビストは含まれない）である。その学歴別内訳を見ると、大学専科レベル以上の高等档案専門教育を受けた者は一四パーセントに当たる一一、四六三人いるが、その内約六〇パーセントが「成人教育」の大学レベル・コースを修了した者となっている。また三六パーセントに当たる三一一六人（三〇、一一六人の誤りか）は、中等学校レベル以上の档案教育を受けた者である。これを一九八五年の統計[8]と比較すると、五年間でアーキビストの総数は三倍以上になっているが、高等教育修了資格を持つ者、中等教育修了資格を持つ者ともに、比率は下がっている。

次に、一九九〇年の統計に戻って、アーキビストが持っている専門資格のグレード別内訳を見ると、上級専門資格保持者が一、六五五人（二パーセント）、中級専門資格保持者が一五、〇七二人（一九パーセント）、初級専門資格保持者が三三、四〇五人（四一パーセント）ということである。ここでいう専門職資格（英文ペーパーではprofessional titles）が具体的に何を指すかはよくわからないが、いずれにせよ彼ら専門職資格保持者のうち七二パーセントは成人教育ないし現場教育で養成された人たちであるという。

第5表　アーキビストの現状（1990年統計）

アーキビスト数（但し、中小機関の档案室は除く）	81,136	
うちアーキビスト高等教育修了者	11,463(14%)	うち60%は成人教育による
アーキビスト中等教育修了者	30,116(36%)	（原文では3,116人）
うちアーキビスト上級タイトル所持者	1,655(2%)	うち72%は成人教育または現職者教育による
中級タイトル所持者	15,072(19%)	
初級タイトル所持者	33,405(41%)	

六　まとめ

中国は国と地方の档案館の数が三、六〇〇館を越え、この他にも企業や学校・病院などの組織には必ず档案室が設けられているという。数の上から見れば、まさに〝文書館大国〟というにふさわしい。アーキビスト養成も、したがって他国では類例を見ない規模で行われている。しかも、ただ単に数が多い、規模が大きいというだけではない。中国人民大学档案学院のカリキュラムや教材、設備、教官の研究水準などを見るかぎり、教育の質もかなり高いものであると推察される。

また海外の文書館学、史料管理学に対する関心の深さと研究熱心さも、予想をはるかに越えるものであった。欧米語の文献は、数年前のＩＣＡ国際会議の議事録に至るまで、数多く中国語に翻訳出版されている。驚いたのは、中国のアーキビストが日本の文書館事情にたいへん詳しいことであった。全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）が一九八九年と一九九〇年の二回、訪中代表団を派遣したせいもあるが、一九九〇年一〇月に創刊された全史料協の機関誌『記録と史料』の内容が、わずか数ヵ月後に中国人民大学档案学院の『档案学通訊』に紹介されるくらい、海外情報の流通が早いのである。

もちろん課題もいろいろある。シンポジウム報告で中国側があげていたのは次の四点であった。

(1)档案工作の標準化と在職者教育の標準化

(2)在職者教育用の教材の開発

(3)国立アーキビスト教育センターの早期設置

(4)教育スタッフの政治的・専門的質の向上

アーキビスト養成が多様な方法で大規模に行われているために、教育の標準化や、優秀な教育スタッフの確保に、かなり困難を生じている様子であった。

ＩＣＡ専門職教育部会委員会は、最終日の九月一四日に開いた会合で、中国に対する委員会の「意見表明」なるものを採択した（こういった場合には、ふつう開催国に対する「勧告」recommendation を採択するのだが、中国に対してはとくに勧告の必要はないという判断から、「勧告」でなく「意見表明」となった）。次の四点である。

①中国は今後もすぐれたアーキビスト教育の発展に努めてほしい。

②中国は中国語で発表される文書館関係の雑誌、専門書に英文要約を付してほしい。

③中国は少なくとも二年に一回くらい（できれば毎年）、アジア・オセアニア地域を対象にしたアーキビスト研修講座を開催してほしい（英語で）。

④中国国家档案局は、アジア・オセアニア地域を対象にした情報誌のようなものを発刊してほしい。

中国が今後、アジア・オセアニア地域はもちろん、世界の文書館界とアーキビスト教育の分野で、主導的な立場の一角を占めるのは間違いないだろう。

注

(1)「第一回アーキビストの教育と養成国際シンポジウム」（一九八八年、パリ）と「第二回アーキビストの教育と養成国際シンポジウム」（一九八九年、ミラノ）の概要については、『史料館研究紀要』第二十一号（一九九〇年）に「アーキビストの教育と養成をめぐる新しい波―ＩＣＡ国際シンポジウムの諸報告―」と題して紹介しているので参照されたい。

(2)本稿の主な情報源としたのは、中国人民大学でのシンポ

ジウムにおける次の二つの報告ペーパー。中国語原文をまだ入手しておらず手元には英文のものしかないので、あるいは日本語訳が不適切なところがあるかも知れないがご寛恕願いたい。

Zhao Guojun, Vice-dean, Archives Department. "An Introduction to the Archives College of the People's University of China".

Wang Jinggao, Director of Department of Synthetic Research, Technology and Education of State Archives Bureau. "In-Service Education of Archivists in China".

ほかに参照した文献は以下の通り。このうち3は国立公文書館氏家幹人氏の提供によるものである。

1 中国人民大学档案学院編『档案専業主要専業課程教学大綱』、一九九一年三月、中国科学技術档案出版社

2 「当代中国」叢書編輯部編輯『当代中国的档案事業』、一九八八年四月、中国社会科学出版社。本書については、『藤沢市文書館紀要』十五（一九九二年三月）に、前半部分の全訳が掲載された。後半部分も次号に掲載の予定である。

3 中国人民大学档案学院専門課程科目一覧（仮題、本の一部のコピーのため書名不明。発行年も不明であるが、ごく最近のものであることは間違いないとのことである）

4 Chen Zhao Wu, Professor of Archives Administration, Chinese People's University. "An Introduction to Archives Education in China", ARCHIVUM, Vol. XXXIV, 1988.

5 牛創平・趙海林・張平安・李徳寛・徐玉清編『英漢档案学詞彙』、一九八七年、档案出版社

(3) 「档案」は史料として永久保存されるべき記録、すなわち記録史料のことで、英語の archives にあたる。したがって、「档案館」はわが国の文書館または公文書館のことである。

(4) 「アーキビスト」archivist は、前掲『英漢档案学詞彙』によれば「档案工作者」「档案保管員」「档案館負責人」という訳語があてられているが、中国語文献では「档案専業人才」「档案幹部」「档案工作人員」というような表現も多く見られ、必ずしも固まった名称があるわけではないようである。

(5) 以上の四校の名称は英語からの訳なので、中国語の正式名称とは異なるかも知れない。

(6) 注（2）の資料2によれば、一九八一年。

(7) 中国語の原語がわからないので正確に理解できないが、職種別研修のようなものかと推定される。

(8) 注（2）資料2による。

あとがき

1951年5月に文部省史料館として発足した当館は、この度開館40周年を迎えた。本号は、これを記念し「史料館40周年記念特集」と題し、館員はじめ、1991年度に内地研修員であった平川新氏にご参加いただいた。例年以上に内容の豊かなものになったことと思う。

史料館のこれまでの活動や今後の展望、そして昨年12月に催された「史料館四十周年記念祝賀会」については、別に刊行した『史料館の歩み　四十年』、『史料館報』55・56号をご覧いただければ幸いである。また、記念事業の一環として史料館が収蔵する全国の古文書目録を『近世・近代史料目録総覧』と題し、近時刊行の予定である。

史料館の40周年は、多くの方々の御協力をもってはじめて迎えることができたものである。今後とも一層のご支援を心よりお願い申し上げたい。